

連載 大工道具に生きる その43 四国大工 香川 量平



那須野ヶ原の殺生石



白鷹幸伯氏の鍛冶玄能

玄能の話

日本の打刃物が良く切れるのは昔「サムライ」がいたからだという外国の青年がいた。その理由を問い質すと「サムライが日本刀を作らせていたからだ」と言ったそうである。しかし、良く考えてみると、たしかにその青年の言う通り、我が国の打刃物鍛冶たちは、あの高度な鍛冶技術を持つ刀匠の流れを汲んでいるのである。その外国の青年は日本の刃物文化を研究しているのだと言う。明治九年、明治政府が断髪令と廢刀令を全国に公布した。断髪令というのは男性の丁髷ちやんまげを切り落せという法令であった。私の家の近くほこらに丁髷塚と呼ぶ小さな祠がある。私が小学生の頃、祖母が「ここには大勢の村人たちの丁髷が埋められているから、ここを通る時には拝むんだよ」と教えられた。しかし、今の自治会の人々は誰も先祖の人たちの丁髷が祀られていることなど知らない。廢刀令とは刀を作ってはいけないし、刀を腰に差して外出してはならないという法令であった。廢刀令によって我が国の各流派を誇っていた刀匠たちは、内心かなりの抵抗はあったが、生活する糧かてを得るため自分の鍛冶技術を生かして刃物鍛冶に転職したのであった。中でも有名な徳川幕府の御用鍛冶であった八代目の「石堂是一」壽永は明治三年頃から、すでに鉋鍛冶に転職していたといわれる。しかし、日本刀に自分の銘を打っていた壽永は大工が使う鉋などには銘は打てぬといって地金部分に矢羽根の鋳跡を入れ、石堂鉋の商標としたのである。日本刀の切味は試し切によって評価されるが、業物位列（日本刀の切れ味をランク付けするもの）で

は「大業物」「良業物」「業物」とある。一番良く切れるのが大業物で、次に良く切れるのが良業物で次が業物である。昭和の正宗と呼ばれる名刀も「業物」さえ付けられないという。八代目の石堂是一の刀は良業物であったといわれるから、かなり切れたのであろう。その刀匠が鍛えた鉋刃が良く切れたのは当然のことである。

昔、弁慶は七つ道具を身に付けていたといわれるが、大工にも七つ道具がある。指金、墨壺、鉋、鑿、玄能、鋸、鉋である。しかしその七つ道具の中には刃物でない道具がある。指金、墨壺、玄能である。大工が木材に墨付する大切な道具が指金と墨壺であるが、大工が一日として手離すことが出来ないのが玄能である。この叩く道具には木槌と鉄鎚とがある。鎌倉時代、1309年に描かれたという「春日権現験記絵巻」の中に大工が普請場で働く様子が描かれている。鉋を片手で操り木材を加工し、墨打をする大工や槍鉋で厚板を加工する者、木材を両刃鑿で二つに割ろうとしている大工が振り上げているのは木槌である。また1311年に描かれた「松崎天神縁起絵巻」にも大工の普請場が描かれ、下では木材を二つ割にしようと振り上げているのは同じく木槌であるが、小屋組の上では極たるきに釘を打っている大工は釣鐘形の鉄鎚つりがねがたを振り上げている。昔の絵師が書いたものであるから正確な事は言えないが、その当時、鑿を叩く時には木槌を使い、鉄釘かすがいや鋸などを打つときは鉄鎚を使っていたようである。

平安時代の中期、源順みなものしたごうという学者が編纂した漢和辞書である『和名類聚抄』わみょうるいじゆしょうは漢文で書かれているので十分に読みとることが出来ないが、工匠第百九十二の項に「広雅いわく鉋かなずちは加奈都知、

和名鉄槌也」と説明しているが槌の字が木偏となっているが「鍛冶具第二百の項に鎚（カナズチ）」と仮名を打っている。その頃の文字は木工具には木偏を使い鍛冶具には金偏を使って使い分けしていたのであろうか『江戸萬物事典』では槌という文字を「つい」と呼び、槌は物を打つものであり、柀揆しゅうきとは「さいずち」のことであいずち揆撃とは「かけや」のことであると説明している。

大工道具の中で一番良く使うのが玄能であるが、この道具の語源は、昔、偉い禅僧であった源翁和尚が那須野ヶ原で殺生石を打ち砕いたことにより、この和尚の名が付けられているという伝説であるが、昔の学者たちが、その伝説話を後世に伝えるべく上手に書き表している。徳川綱吉の時代、京都に黒川道祐という学者が『雍州府志』という著書を十巻十冊書き著した。その第七巻の中に「洞家の僧、玄翁和尚が呪を誦し、大なる鉄鎚を以て其の石を砕く。然して後、怪止む。世に石破り玄翁と称す。茲に自り石工、大鉄鎚を謂ひて、直に玄翁と曰ふ」と漢文で書いている。また、図入風俗事典である『人倫訓蒙図彙』は七巻七冊で蒔絵師、源三郎画で元禄三年（1690年）に書き表されている。その第三巻の中に「昔、下野国、那須野原の殺生石を玄能禅師、一句をしめし持念あれば、悪霊、石を分て出しより、石割を玄能と号す」と書いている。また、1713年に大阪の医者であった「寺島良安」が『和漢三才図会』という図説百科辞典を書き表した。その第二十四巻の百工具の項に漢文で「鎚」と書き、和名で「加奈都知」、絵図には大鎚と源翁が書かれている。「廣雅に云く、鎚は鉄鎚也、按ずるに鉄鎚は釘を打つ鎚なり数種あり、柀こけらぶき茸は竹釘を打つ、鎚は生鉄を以て之を作る。銅器を作る人が用いる鎚は頭に鋼を加えて之を作る。大鎚は鍛冶の家が之を用いる。大きさは柀揆のごとく、その柄、長さ三尺余、源翁の大きさは枕のごとく、之を以て、鉄石を破く。昔、禅僧源翁と云う者有り、偶、偶、野州那須野に行きて、呪して殺生石を破く。而して後、俗に石を破く鎚を称し源翁と曰う」と書いている。この和漢三才図会に書き表している玄能は柄が三尺余りあると説明しているから鍛冶職人や石工職人が使う玄能のことで、大工の玄能は、後々に名付けられたのであろう。

殺生石は栃木県の北、日光国立公園の那須ヶ原の温泉郷にある。扇應山の中腹に位置し、徒歩で登りつめた所にある。硫黄の香が立ち込め、風の無い曇天の日は硫化水素ガスが噴気しているので

注意を要するという立て札がある。そして那須町が表示している立て札がある。

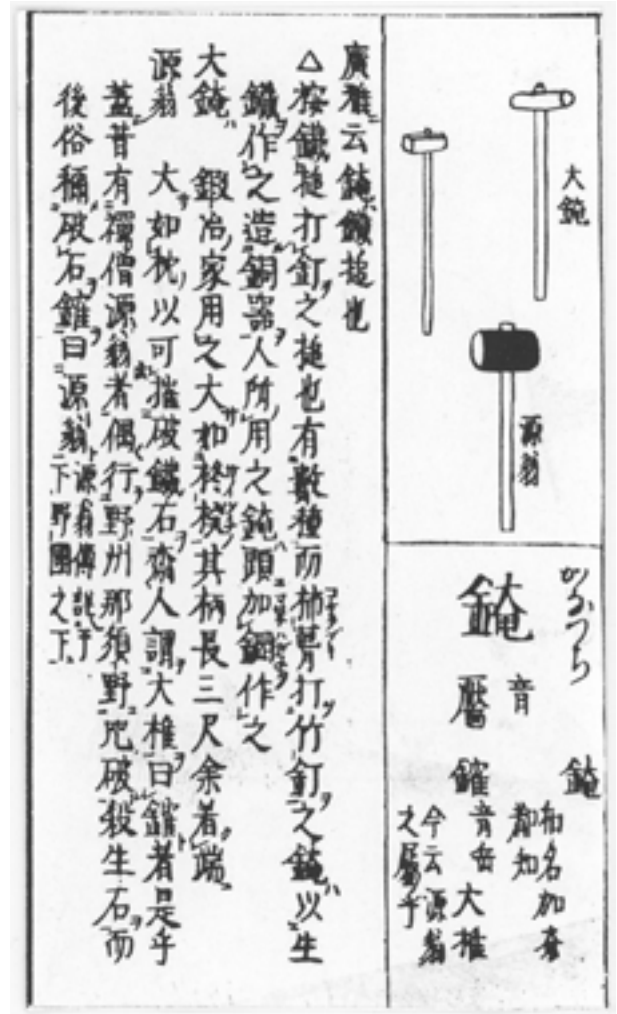
「昔、殺生石は白面金毛九尾の狐伝説として知られ、インド、中国、そして日本の三国にまたがる雄大な歴史を背景に、美女や妖怪、宮中人などが登上する怪奇で広大なスケールとして描かれている。また、荒涼たる殺生石の情景は多くの文人たちによって数多くの文学作品として紹介され、全国的に知られる史跡の一つとなっている。話は平安時代、第七十四代の鳥羽天皇の御代、インド、中国を荒し廻った九尾の狐は、やがて日本に渡来して『玉藻の前』という美女に化身して、帝の寵愛を受けるようになった。帝の命を奪い、日本を我がものにしようとした玉藻の前は陰陽師の安部泰成によって、その正体を見破られ、白面金毛九尾の狐の姿となって那須野ヶ原に逃げ込んだのである。それを知った朝廷は上総介広常、三浦介義純の兩名に命じて、九尾の狐を退治させたのであるが、狐は死して巨石と化し、その怨念は毒気となって近づく人や家畜や鳥獣をも殺し続けたのである。室町時代になって、これを伝え聞いた名僧、源翁和尚はこの地を訪ね石に濟度、教化を授け持っていた杖で一喝すると石は三つに割れて、一つは会津へ、もう一つは備後へと飛んで行き、残った一つがこの殺生石であると伝えられている。殺生石は室町時代の『下学集』に初めて登場し、その後、謡曲に殺生石が書かれ、江戸時代には歌舞伎の演劇の題材として上演され、日本国中に知られるようになったのである。」

以上が立て札に書かれている殺生石に纏る伝説話である。名僧の源翁和尚が殺生石を打ち砕いたことにより石工が使う石割の大鎚が玄能と呼ばれるようになったのであるが、その名付けの親は源翁和尚である。

大工が使用する玄能の種類には、大玄能、中玄能、小玄能、豆玄能などがあり、大工は仕事によって、その玄能を使い分けている。玄能は叩く面が両方にあるもので、一方は平で鏡と呼び、もう一方は木殺し面といい中高となっている。鏡の面で鑿の頭を打ち、木殺し面で板など打ち、釘を追い込む。鏡の面は名の通り、いつも光っていなければならない。建具職人や彫刻職人が使う「ダルマ玄能」は使い勝手の良い様に玄能鍛冶に作らせたのであろう。また鍛冶職人が使う玄能は、ヒツ穴が中心よりずれているのは玄能の「ふれ」を止めていると白鷹幸伯氏は言う。昔から瀬戸内の舟大工が使っている片口玄能がある。舟手用と呼び、鉦などと

同じく岩国型と呼ぶ。物を叩く面が一方であるから金鉈であると思うが、瀬戸内では片口玄能と呼んでいる。しかし、使い勝手が良いので大勢の大工がこの片口玄能を使用している。

玄能を選ぶには姿と形、そして右と左のバランスが良く、ヒツ穴が大きくなく完全にうまく抜けていることが大切で、自分の腕力と体力に合せ、一生ものだから高級品のものを選ぶ。越後の玄能鍛冶、故長谷川幸三郎氏の鍛えた玄能か、同じく三条の洞心齊正行氏の玄能が現在、好評である。玄能の柄は白カシが良いとされているが一番良いのが「カマツカ」(別名カマノエ、ウシコロシ)が最高と昔から言われている。ウシコロシとは恐ろしい名だが、カマツカの枝の細い部分が牛の鼻(はなご)子に使用されているところからこの名がある。この木で作った柄は掌に熱を持たさず、汗を引き、折れず曲らず、古い昔から大工が愛用してきた最高の柄である。また柄のすげ方は自分の手になじむ様、試行錯誤を重ねることが重要。柄の抜け知らず法は、乾燥が第一で、一週間かけて、すこしづつ追い込む。最後にエポキシ樹脂系の接着剤をぬり、中央部に鉄の割楔を打ち込み固定する。柄の長さは、個人差があるので玄能の頭を握って腕の長さ迄が最適。昔から玄能の柄に割楔を打っている大工は下手とされたが、外国製のハンマーにすべて鉄の楔が打ち込まれているのは実用性に富んでいる。



和漢三才図会の玄能話